

健康文化

## ゴマメの歯ぎしり「今時の世の中は」

佐竹 健吾

健全な肉体に健全な魂が宿ると言うが、我が国の競争と効率至上主義により、急激な産業の進展はかつてない経済的繁栄をもたらせたが、各個人における内面的適応能力と、社会的条件の間に不適合状態を生み、このストレスは、国民の半病人化を招いていると言われて久しい。書店の店頭には、大衆向きの「家庭医学」「〇〇健康法」等、民間医療、健康法などの書籍、雑誌が氾濫し、また、健康食品ブームに続くグルメブームで、飽食が心身の不健康に輪をかけている。

我が国の医学医療は、他の関連分野の学問の発展と相俟って社会的願望に応え、かつてない長足の進歩を遂げつつあり、我が国を世界に冠たる長寿国としたが、医学が病を克服する程に、医療費の増大を招き、また長寿社会化は老人問題という新たな社会問題を生んだ。

日本人は、経済繁栄の中で、物・金の充足の代わりに、精神的貧困を招いていると言われており、経済的な繁栄の中に感性豊かな、健全な心を見失わないで欲しいとの思いが頼りである。

先人の営々として蓄積して来た努力の結果を享受していることを忘れ、見掛けの経済的繁栄に眩惑され、明日への精神的蓄積を失ったとき転落は始まる。

豊かな、健全な心とは何か、人は何故に生きるかは永遠の課題なのだろうが、少なくとも明治の先賢達は、日本の将来は教育にありと、教育制度の充実につとめ、また、先進諸国の干渉の中で、産業の振興と産業基盤の整備につとめ、今日の繁栄をもたらした。明治以来の、明日を見つめ、明日を信じ、明日の為に蓄積して来た結果がここに花開き、経済的繁栄と長寿をもたらした。開花のあとこれを枯らすか、花開き続けるかは、現代に生きる我々の努力にかかっている。

見掛けの経済の繁栄に眩惑され、明日への見通しも持たず、今後の繁栄への基盤強化をなおざりにして、先人の築いてきた蓄積を浪費して刹那的に生きる「三代目的」群像が日本の現状であったと後世の批判を受けないようにしたい。

今後に残すべき基盤とは何であろうか、人類は開門以来、物心両面の充実を求めて文化を発展せしめてきた。文字通り「健康で文化的な」理想郷を求めユートピアを夢み続けてきたのである。

現在基礎研究の充実への声が高い、戦後立ち遅れた産業発展のため、社会的要請の名のもとに、大学の工学部は技術者養成と技術の開発に力を注いだ結果、工業技術については画期的な発展を遂げ有数の工業国になったものの、基礎技術の分野の研究と、大学教育に空洞化を来している。

吾が国における基礎研究の重要性の声は内外に高まっており、各省庁或は産業界でもそれぞれの研究機関等を設けまたは拡大して基礎研究を拡充強化しつつある。

然し乍ら将来に向けて守らなければならない基礎研究は、各省庁における行政目的を持った、或いは、企業の生産への志向をもった研究でなく、国家 100年の計から、文化の中核となるべき大学の基礎研究と、日本の将来を担う人材、とりわけ大学の後継者養成にこそ力を注ぐべきである。然るに現実には、企業の研究所の恵まれた研究環境に引かれ、人材は大学に残り難い状況がある。ことに企業の研究所における基礎研究の目的は、一般的に文化への投資ではなく、「基礎研究をいち早く事業化に結び付けるには自ら研究機能をもつことの有用性、製品の信頼性向上、基礎研究を積んだ人材は応用研究にも優れた能力を発揮する」等という実利性にある。(研究機関における基礎研究者として望ましい資質は、工業社会における効率的集団の倫理と相容れないとの指摘もある。) 企業も利益の社会還元の意味から、文化の振興に力を振り向けてほしい。(最近企業がこの方向に向かいつつある事は喜ばしい事である。)

当然のこと乍ら企業は利益至上主義であり、社会的分担として大学における基礎研究の肩代わりができるということはない。

国際的に果たすべき学問への貢献から言っても、ヨーロッパには産業革命以後の科学技術の蓄積があり、文化の伝統も豊かである。また、アメリカについても優れた基礎科学をもっており未だに大学教育については、アメリカに学ぶべきものが多いと言われている。

直接・直ちに経済的利益に繋がることのない基礎科学についても、経済先進国となったいまこそ国際社会への分担責任を果たすべきときである。

経済の繁栄だけを追及し、文化総体或は科学の基盤への貢献を怠るならば、貿易摩擦に象徴されるように国際社会の中で日本は孤立を余儀なくされること

になろう。

また、今、「文化」の時代であるという、国は故郷創生に金を出すという。心豊かにゆとりのある生活を、或は触れ合いをとという、その結果が、地域のリゾート計画、研究学園都市、工業団地など、地域主導の地域づくりのかけ声、国の総合開発計画による誘導などもあるだろうが、同じ様な計画が各地域で競走している。狭い国は益々狭くなり、文化施策としての〇〇会館建設ブームは、この維持のための負担を後の世代に強いている。文化は感性だと云い、つい最近までコマーシャルベースの掛け声であったが、感性の時代だと言っていたおしゃれだとか、化粧品だとかが文化になってしまっは如何なものかと思うのは私だけだろうか。

人類創生以来、人が人として健やかに生きるため、蓄積してきた人類の知恵を未来に向けて検証し、更に新たな知見を加えて行く努力の中に、文化は発展し続けるであろうが、この努力を失ったとき、人類はまさに転落への道を歩み始めたと言うべきである。

飛鳥時代、平安時代以降に続く学問僧の中国への大量の渡航、明治初期からの、洋行、第2次世界大戦後の欧米への留学等、人々は新知識を求め我が国の文化に新知識を加え、現在までの日本文化を形成してきた。明治維新による新政府は、基幹産業の国営による産業振興政策と、産業革命後のヨーロッパの工業技術を専ら吸収することにより、工業立国を目指してきた結果、産業面では成功したと言ってよいが、今ここに、有数の工業国として、国際社会での生き方を問われている。

「文化」の定義については、学者によって色々な定義が述べられている。文化の定義について云うつもりはないが、生活を豊かにする筈の近代化、合理化が折角積み上げた文化遺産を食い潰して行く姿が各所にみられるのは、皮肉な現象である。

我が町でも最近流行の例にもれず、文化振興のため「文化行政懇談会」なるものを作って、「文化の薫り高い町造り」を目指し故郷創生資金により文化活動を進めようとしている。我が町は、川あり山あり緑あり、桜は随所に咲き誇り、日常の買い物の場所には事欠かない大変結構な町ではあるが、いまひとつ活力に欠ける。掛け声と懇談だけではことは進まない。

行政全般を通じた総合性と一貫性がなければ掛け声倒れに終わる。行政機関に常に変わらぬ見識を期待するところである。

この懇談会発足以前に実施された問題ではあるが、我が部落にあっては、町名の近代化のため、古くからの呼称を廃し田圃を区画して〇丁目と名称を変えた。田圃の中の一軒屋である我が家も「竹下 26-1 番地」が「6 丁目 47 番地」となった。我が家の田圃も〇丁目である。この流れが懇談会組織後の今も続いている。

更に、土地改良事業の中で、名所となっていた幾つかの旧跡がその姿を消した。例えば、「鞍掛けの松」「王太田」など、名所の紹介・地方史の書籍にその名が残っているが、土地改良事業とともにその姿は消滅した。またそのイメージも我々の記憶から薄れつつある。

我が家に一子相伝、他に口外したときは直ちにその効力を失うと言い伝えられている「突き目の目薬」なる家伝薬がある。終戦後も暫くは作って、訪ねて来る人たちには差し上げていたが、いまは作っていない。その他にも、漢方薬、民間治療法の覚え書きが沢山保存されているが、いつか逸散してしまうことは確実である。その外我が従兄弟の家では腎臓の家伝薬が伝えられている。我々の子供の時、ある寺院の家伝薬として衣文のゴムソなる傷薬があった。この粉薬をつけると忽ち止血、劇的にその切傷等治癒した記憶がある。今作っているかどうか知らない。日本中には沢山の家伝薬の言い伝えが埋もれ、忘れさられ捨てられているに違いない。先人の知恵であるこれらの中には、副作用なしに劇的に利くものも有ろうと思うと、これらを集め、改めて薬効を確認し今の医療に使えないものか、等と素人である故に気楽に、時々思ってみる。

文化が人類の過去から未来に至る生活の集積であるとすれば、先人のこれら貴重な生活体験を系統的に整理し現代に生かせるものは生かさないと勿体ないのではないかと思うが如何なものか。捨て去ったものの中に案外珠玉が埋もれているかもしれない。素人のたわごとである。

(名古屋大学工学部事務部長)